

教材発掘の第五回として、「字謎」をとりあげてみたい。「字謎」とは文字のなぞなぞであり、中国の言語遊戯の一つである。六朝の文学評論「文心雕龍」諧隱篇によれば、「字謎」は、「隱」すなわち喩えや謎かけなどを用いて婉曲に意見を伝えることに由来し、この「隱」が魏以後に軽んじられて「謎語」と化したと言う。そして「文心雕龍」は、この「謎語」の類は「隱」の精神を失った子どもの遊びのようなものであつて価値はないと批判する。中国古典の世界は、儒教思想の影響によって政治性や道德性を帯びた作品が評価され、その基準に該当しないものは排除される傾向にあり、小説や恋愛などのジャンルがそうであるように、遊戯文学もこれまでほとんど研究の対象とされることはなかった（福井佳夫『六朝の遊戯文学』汲古書院二〇〇七）。しかし言語には、本来的な意志疎通という機能以外に、我々の言語生活を豊かにし、創造性と想像力に富む側面がある。言語遊戯もその価値を積極的に捉えれば、この言語のもつ想像力、ものを創り出していく力に関わるものであろう。そのような思いから、このたびは三国・六朝期の「字謎」とその分類や類話をとりあげ、中国の言語遊戯の一端を紹介したい。

まずは「世説新語」捷悟篇から三国魏の武帝曹操とその臣であつた楊脩との逸話。これは「字謎」の濫觴と俗に伝えられる逸話であり（宋・周密『齊東野語』、問題となるのは曹娥の碑に記された「黄絹幼婦外孫糞白」という八文字。「世説新語」の劉孝標注に引く『会稽典録』及び『後漢書』に拠れば、曹娥の父は川に落ちて遺体が上がらず、当時十四歳であつた曹娥は嘆き悲しんで父の遺体を求め、

父の遺体の上で沈めと言つて、瓜を川に投げ入れた。十七日の後、たまたま瓜が沈むと曹娥はついにそこに身を投じて亡くなり、それを哀れんだ県の長官が碑を作らせたと言う。また同じく劉孝標注に引く『異苑』に拠れば、後漢末の文人蔡邕が、曹娥の碑に刻まれた碑文を読み、その傍らに記したのが問題の八文字であるという。つまりこの八文字は碑文に対する蔡邕の評語だと言うのである。では、一体碑文をどのように評価しているのだろうか。

この曹娥碑の逸話は、三国志ファンにはよく知られた話であり、曹操にはこの類の逸話が『世説新語』に幾つか残されている。いずれも有名な例ではあるが、一つは曹操が造りかけの門に「活」の字を記させ、それを見た楊脩が、曹操は門が大きすぎることを嫌っているのだ、と即座に曹操の意図を理解したという話。もう一つは、ある人から酪（ヨーグルト）をもらった曹操が、その蓋に「合」の字を書いて臣下に示し、誰もその意図が理解できないでいると、楊脩は迷わずにそれを飲み、これは一人一口ずつ飲みということだ、ためらうことはないと言つたという話。いずれも捷悟篇に見える。

この二つの逸話は、いずれも曹操が群臣に謎をかけ、楊脩がその謎を解いて、曹操の意図を言い当てるというものである。曹操と楊脩との関係が示された逸話であり、また彼らの字謎は、いずれも文字の離合を用いたものであることがわかる。文字の離合とは、漢字の形を分解したり、合成したりすること。先の話では、門+活=闕、合+人+一+口となる。このような文字の離合が後漢末頃から現れるのは、許慎『説文解字』のように漢字を部首分類して大系づけようとする当時の文字認識のありようを反映するものである。この他

にも孔融「離合詩」が有名であるが、詳しくは鈴木棠三『新版ことば遊び辞典』（東京堂出版一九八二）や佐藤進「中国の古典遊戯詩」（江口一久編）ことば遊びの民族誌 大修館書店一九九〇所収）等を参照。

さて、本文の字謎も文字の離合を用いたものであり、二文字で一文字を表す。「黄絹」は色の糸で「絶」、「幼婦」は少い女で「妙」、「外孫」は女の子で「好」、「蟹白」は辛を受くで「辞」、「蟹」はニラ、シヨウガなどの野菜を刻んで混ぜあせたもの、「臼」はそれらをまぜあわせる器。ニラ、シヨウガなどは味の刺激が強い野菜なので「辛」という。これで「絶妙好辞」という四文字となる。

曹操は、はじめその意味を解せず、随従していた楊脩に尋ねると彼は解けると言う。そこで曹操は、しばらく楊脩に解答を保留させて考え始める。そして、三十里ほど進んだのちに曹操もその意味を会得し、互いに解答を記してみると、両者の解答は一致した。そこで曹操は感嘆して「私の才能は君に及ばないこと、三十里であることがいま分かった」と言った。三十里は現在の約十五キロ、車馬が馬でゆっくりと進んだとして、二時間か三時間くらいであろうか。このように曹操が才能の差という目には見えないものを言い表そうとしているところも、この逸話の面白いところ。

二番目は、鮑照「字謎詩」三首の第一首。鮑照は六朝宋の詩人。詩才豊かであったが、家柄が低かったために官界で出世することができなかった。その詩文には多く不遇の思いが託されるとされるが、一方で彼はこの字謎詩のような遊戯の詩も多く制作している。

本文は、ある漢字一字を、四言四句の詩で解説したもの。毎句そ

れぞれがその漢字一字の説明となっており、第一句と第二句はその漢字の字形を示す。第一句は二つの形が合体して一つとなるということ、第二句は「四支」が四肢と同じで、四本の手足で八つの頭をもつということ。第三句も字形だが、ここは算数を用いる必要がある。三五の夜といえは十五夜、二八の歳と言えは十六歳。四八一八であれば、果たして…。第四句はその漢字の意味を説明する。「飛泉」は噴き出る泉。「仰流」は四方の民が徳化（流）を慕う（仰）という意。噴き出る泉又はその水流が思い慕うところとは…。

なお鮑照「字謎詩」三首の其二と其三は次のようである。

頭ハ如レ刀ノ尾ノ如レ鉤ノ
中央ハ横ニ広ク四角ニ六抽ル
右面ニ負ニ兩ニ刃ヲ左辺ニ双ニ属ニ牛ヲ（其二）

乾ノ之一ニ九ニ隻ニ立ニ無シ偶ル
坤ノ之二ニ六ニ宛ニ然ト双ニ宿ル（其三）

其二是三言、四言、五言と二句ごとに一字増えて全六句。其三は四言四句。この二首は其一とは異なり、或る漢字一字の形を詩全体で解説したもの。其二是亀の旧字体「龜」。ご覧のように旧字体の「龜」は、上の部分が刀の形に似て、下は鉤のように曲がる。中央は横に広く、右側は四角で、左側は六つの線が飛び出ている。「抽」は抜き出す。また右の四角の中は二本の刀が交差するようであり、左側には牛の象形のようなフオーク型の部分が二つ並んでいる。

其三是「土」。乾と坤は易の卦のこと。易の卦は陽爻一と陰爻二の二つによって構成され、乾卦(☰)は全てが陽爻からなり、坤卦

☰☷(九)は全てが陰爻。陽爻は「九」、陰爻は「六」と呼ばれ、「一九」は陽爻一つで、これが一人で立ち(隻立)偶が無いので「一」。「二六」は陰爻二つ、まるで(宛然)一緒に宿る(双宿)ようなので「二」。二つを合わせると「土」となる。

其二是旧字体の知識が、其三是易の卦爻の知識が必要とされ、やや難解である。それに比べて、其一は答えとなる漢字が学習者も見慣れたものであり、その見慣れた漢字を複数の視点から見つめ直すことができて面白い。さて、その其一の答えは「井」。「十」を二つ合わせた形、四つの線で構成されて頭が八つ。四八は三十二、一八は八で、二つを足すと四十。「井」は十が四つ。「井」は水をくみ出す場所であり、また「釈名」釈宮室に「井は清なり。泉の清潔なる者なり」とあり、「飛泉」が徳化を慕うという意とも適合する。

その他には古楽府「菓砧」などにも有名だが、ここでは宋の周密『齊東野語』卷二十「隱語」から、幾つかの例を紹介しておこう。

一月復一月、両月共半辺。上有可耕之田、下有長流之川。六口共一室、両口不二田。

東海有魚、無頭亦無尾。除去脊梁骨、便是這箇謎。

寒則重疊、熱則四散分流。四箇在縣、三箇在州。村裏不見在村裏、市頭不見在市頭。

一つ目は「用」の字、二つ目は「日」の字、三つ目は漢字一字ではなく、字点(丶)。「齊東野語」の例は、鮑照「字謎詩」に比べる

と平易であり、また「昼時 円、写時 方、寒時 短、熱時 長」(「日」のように現在のなぞなぞ(物謎)に近いものも多い。中国では現在もこのような「字謎」が盛んに制作されており、日本にも漢字を用いた言語遊戯の例が残されている(鈴木・江口前掲書及び高橋康也編『遊びの百科全書①言語遊戯』日本ブリタニカ一九七九、柴田武他編『世界なぞなぞ大事典』大修館書店一九八四、『日本語学』11-11「特集ことば遊び」一九九二、『月刊言語』29-2「特集言葉遊びを作る」二〇〇二、武井満幹「中国語の「字謎」の活用」『中国語研究論集』10二〇〇二などを参照)。例えば、「米寿」「卒寿」「白寿」なども「字謎」の一種であり、我々の身近なところにも「字謎」は見出すことができる。次に掲げたのは、『藝藩通志』卷三十・巖島藝文五に採録される空海の作と伝えられる遊戯詩。これは稿者が学生の頃、『宮島町史』編纂に関わった先輩から教えていただいたもの。先の鮑照「字謎詩」とともに、稿者の遊戯文学への興味を開いてくれた詩である。所謂「回文詩」の一種だが、さて、これはどう読めば良いのか。

島唱真言

島開仏寺示観

島聴花鯨催晚人密

島安般若婆羅密景法意

島妙弁才功德天辺縁仙

島看野鹿在江俗閑

島立経蔵弘楽

島行秘術

三番目は、「字謎」のような言語遊戯が生まれた文芸の場を描く逸話として唐の王維の逸話をとりあげた。この逸話は唐末の孟棻『本事詩』情感を出典とする。『本事詩』は詩の制作背景となる物語を集めたエピソード集であり、詩と物語の展開や人物の心情とを関連させながら、謎解きのように詩と文章を読み解くこともできて面白い。教科書教材には「人面桃花」が採用されるが、他にも面白いエピソードが多い。なお『本事詩』は結びの部分に欠いており、『唐詩紀事』のほうが話の展開が明確なので、本文は『唐詩紀事』に拠り、一部字句を改めたところがある。

寧王憲は、唐の玄宗皇帝の兄で、睿宗の長子。はじめ皇太子であつたが、のちに玄宗に位を譲り、岐王範らと共に権勢を誇つた。ある時、寧王は餅を売る者の妻が、色白ではつとするとするほど美しいのを目見て思いを寄せ、その夫に厚く贈り物をして彼女を手に入れ、その寵愛は並々ならぬものであつた。一年を経過した頃、寧王は彼女に「おまえはまだ餅屋の主人（もと、夫）のことを思い出すか」と尋ねると、彼女は黙つて応答しなかつた。『唐詩紀事』はこの「黙然不对」の一文を欠くが、『本事詩』に拠つて補つた。寧王はそこで彼女をもと夫に引き合させた。彼女はもと夫のほうを見つめ、両目の涙が頬を伝い、思いを抑えきれないようであつた。時にちょうどその場に居合わせた寧王の賓客は十人あまり、いずれも詩文に長じる人たちで、それを見て悲しみ傷み顔色を変えない者はなかつた。ここで寧王は詩を賦つづるようになんじ、王維の詩が先に仕上がる。

この王維の詩は、王維の詩集では「息夫人」と題されており、春秋時代の陳の公主で、南方の小国息国の君主の妻となつた女性に取

材したものであることが分かる。彼女が嫁いだ後、息国は強国の楚に滅ぼされ、息夫人は楚王に連れ去られてしまう。そのうち彼女は楚王の子を二人生まれるが、楚王とは一言も話さず、沈黙を以て楚王に抗したという（入谷仙介氏『王維研究』創文社一九七六参照）。事は『春秋』莊公十四年の左氏伝に見える。王維はこの「息夫人」と餅売りの妻を重ね合わせて、次のように歌つた。

現在の寵愛によつて、昔の恩を忘れられるとは思ひなざるな。
花を見ても目には涙が溢れ、楚王とことばを交わすことはありません。

賓客たちの誰もこの詩に繼いで作る者がなく、寧王は妻をもと夫に帰して、その思いを遂げさせたという。

先に指摘したように、『本事詩』には結びの部分、すなわち王維の詩がもたらした後日談がなく、王維の詩を以て結ばれている。『唐詩紀事』では寧王は王維の詩によつて妻を帰した如く読めるが、『本事詩』ではむしろ王維が餅屋の妻の思いを即座に且つ巧みに表現したことに焦点がある。前者ではその諷諭性が、後者ではその表現力が強調されるようであるが、いずれにしてもこの逸話で高く評価されているのは、沈黙する女性の思いを王維が故事を用いて得意即妙に表現し、座の人の心を捉えたことにある。この王維「息夫人」は、鮑照「字謎詩」のような遊戯詩とは異なるが、いずれも集団の共同の場由来するものである。遊戯詩も含めた詩歌は、集団の営為によつて解体と結合がくり返される中から生まれ出たものであり、学習者をそのような営為の場へと導く足掛かりとして、「字謎」をはじめとする言語遊戯を活用することもできるのであろう。